

忠敬測量隊の受け入れについて

前号のつづき



▲忠敬が測量の第1歩を踏み出した事を記念して佐原市の旧居の庭に建てられている記念碑

忠敬は、10次にわたる測量を日本列島の北から南のいたる所で行いましたが、各地の測量がすべて円滑に実施できたわけではありませんでした。200年前の江戸時代後期は平和な時代ながら、徳川幕府の威光はまだ全国津々浦々にまで強く行き渡り、各藩は幕府の顔色を常に窺いつつ統治を行っていたので、忠敬の測量隊を受け入れる各藩の中のいくつかではこの測量活動を非常に警戒し、一行は表向きは測量隊だが実際は藩内の秘密を探りに来る隠密たちに違いないと受けとめ、地元役人がその測量活動を厳しく監視したり、妨害するなどのことも発生しており、特に幕府と常に緊張した関係にあった薩摩藩では、一時忠敬を牢屋に押し込めたこともあったようです。一方細川藩では、何事によらず幕府に大変な気を遣っていたことから、測量隊の活動や宿泊などで些かの落ち度も発生しないよ

う厳しい通達や指示を各手永会所（役所）に伝え、地元の役人も必死になってこれに応えたのではないかと想像されます。

しかし、この忠敬の測量の80数年前の1725年（享保10）には高千穂の百姓450名が草部に逃げ込み（逃散）、1734年（享保19）には高森手永上色見の百姓160数名が厳しい年貢に耐えかねて隣の竹田岡藩領の恵良原村に逃散し、さらに、翌1735年（享保20）には柏村の百姓130名ほどが高千穂へ逃散する事件が連続して発生するなど、この当時高森地域の農民の暮らしは非常に厳しい状況にありました。そして、さらにこの測量から60年くらい前の1750年代（宝暦年間）になると、細川藩は財政立て直しのため田畑などの検知を行おうとしますが、様々な情勢によりすぐには実行できず、地撫しや地引合わせなどとその名目や呼び名を変えた形でしか検地を行うことができませんでした。秀吉が島津を制圧し九州を平定したあとも、肥後では国衆による大きな一揆が発生しており、「検地測量」を行うには細心の注意を払わねばならなかったからです。そして、忠敬が高森に測量に来る半年前の文化8年11月、隣の豊後の国では3万人を越える大規模な農民一揆が発生し、この情報は境を接する肥後と日向の国にも当時密やかに広がったと伝わっており、細川藩では相当に神経を尖らせてこの測量隊を受け入れたのではないかと想像されます。

こうした時代背景の1812年（文化9）、今から丁度200年前の夏、「御用」の旗印を掲げて行われた徳川幕府公認の高森測量はともかく無事に済み、忠敬測量隊の一行は坂梨地区測量のため日の尾峠を越えて行きました。忠敬隊の測量をきっと大きな警戒心と不安な様子で見守った草部や高森の農民たちも、その測量内容が田畑の検地測量とは異なり往還筋だけの測量だったことから、やれやれ一安心という気持ちで測量隊を見送ったのではないのでしょうか。また、高森と野尻の両手永会所の役人たちは、炎天下で測量作業に従事する高齢の忠敬の身を何よりも案じ、高森地区での測量が円滑に無事終了することをひたすら願っていたのではないかと思います。

忠敬の全国各地の測量では、急峻な山坂や大波の荒れ狂う海岸線での測量などの困難さが最初から最後まで間断なくつづきましたが、さらに、測量そのものに対するこのような警戒心による非協力も数々あったと伝わっています。しかし、忠敬は怯むことなくそれらを乗り越え測量をつづけて地図づくりに専念しました。こうした苦心を重ねて完成した日本列島地図は、現代の地図と比較しても決して遜色のない出来映えですが、これには母を亡くした幼い三治郎に向いきっとまわりの誰かが、「おまえの母さんは夜空の星になったんだよ」と教えたのではないかと筆者は考えています。つまり、忠敬は幼い頃から天体にとっても興味を示して星の観察をつづけており、このことが測量家となって日本列島を測量するとき、地上の測量だけでなく天体観測も併せて行うこととなって、結果的には正確な地図の完成につながっているからです。この時代に日本が正確な自国の地図を手にしたことは、その後世界の列強が日本を見直すきっかけともなっており、忠敬の日本列島の地上測量と天体観測は日本に限りない大きな大きな貢献をしているのです。

2月号につづく